

神奈川の郷土史を素材とした 生徒の興味・関心を高める教材の開発

— 高校日本史B「地域社会の歴史と文化」の内容として —

香川 芳文¹

生徒の郷土史に対する興味・関心は必ずしも高くはないことを踏まえ、高等学校日本史B「地域社会の歴史と文化」の内容として、生徒が興味・関心を高め、歴史の考察ができる神奈川の郷土史教材の開発を探究した。研究では、郷土史学習の構図、主題を選ぶ四つの視点、教材化の手順を示し、具体例とし「大山詣で」を主題としたワークノートを作成した。その授業実践の結果、生徒の郷土史への興味・関心に高まりが見られた。

はじめに

伊藤純郎は「生まれ育った生活の場である郷土については、意外に知らないことが多いものです。しかし、地域の見方や読み解く方法を知っていれば、こうした課題も解決するばかりか、郷土への関心も高まり、郷土に魅了されるのも事実です」（伊藤 2000）と述べている。

生徒は、自分の「郷土」だからという理由で、その地域についての知識があり、興味・関心が高いとは限らない。これからの郷土史学習の重要性を考えると、教師には、生徒の興味・関心を高める郷土史教材の開発が求められる。

本研究では、神奈川の郷土史を学ぶ意義を踏まえて、県の郷土史から、教材化にふさわしい主題を選択する四つの視点を考えた。この視点に基づき、一つの例として、県中央部に位置する大山を江戸時代の庶民の旅と信仰という主題で教材化し、県下の学校で共通に使用できるようなワークノートを作成した。そして、授業で使用し、生徒の興味・関心が高められたかを検証した。

研究の内容

1 テーマ設定について

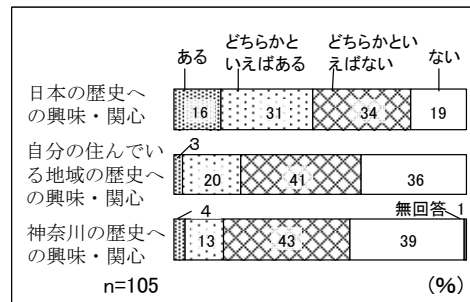
(1) 郷土史学習に対する教師と生徒の意識の差

郷土史学習は、現行の学習指導要領で「地域社会の歴史と文化」という項目の内容に含まれる。「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」の質問紙調査によると「『地域社会の歴史と文化』については、『生徒は興味を持ちやすい』と回答した教師の割合は70%以上であるが、『好きだった』と回答した生徒の割合は約20%であった」（国立教育政策研究所 2007）と、

教師と生徒の意識に違いが見られた。

(2) 生徒の神奈川の郷土史に対する興味・関心の低さ

今回検証授業を実施した所属校の第2学年3学級で、歴史に対する興味・関心についてのアンケート調査を実施した。肯定的回答は「日本の歴史」が47%、「自



第1図 生徒の歴史への興味・関心

分の住んでいる地域の歴史」が23%、「神奈川の歴史」が17%と、日本の歴史よりも郷土史、特に神奈川の歴史に対する興味・関心に低い結果が出ている（第1図）。

その理由としては、「興味がない」「知らなくてもいい」「おもしろみがない」などが多く、また「日本史だと一般的」のように、神奈川の歴史を学ぶ必要性を感じていない生徒もいることが分かった。

郷土史学習の実践に際し、まず、生徒の興味・関心を高める必要があるという課題が見えてくる。

(3) 郷土史学習の学習指導要領上の位置付け

「地域社会の歴史と文化」は、昭和53年の改訂で、初めて学習指導要領に載せられた。佐藤照雄（1981）は、その基底に「地域主義」があるという。中央集権化が進んだことへの反省から起こった地域主義の中で、地域住民の政治的、文化的な意識は高まり、県史などの編さんが行われた。このような地域を重視する流れの中に郷土史学習が位置付けられていたことが分かる。

そして、平成11年の改訂では、新たに設置された大項目「歴史の考察」の中項目の一つに含まれることになった。「歴史の考察」は、「歴史への関心を高め、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」ことをねらいとしている。郷土史学習は、歴史的な見方や考え方を身に付ける学習として位置付ける必要がある。

1 神奈川県立伊勢原高等学校
研究分野（地歴・公民）

(4) 神奈川の郷土史学習の課題

ア「かながわ学」の発信

神奈川県は、平成19年8月に教育の指針として「かながわ教育ビジョン」を発表した。第5章重点的な取組み、Ⅷ. 学びを通じた地域の教育力の向上の中に「かながわの魅力にもとづく『かながわ学』の発信」がある。「かながわ学」とは、「かながわの自然や歴史・風土、文化芸術、産業や観光などを背景にした各地域の様々な活動など」（神奈川県教育委員会 2007）としている。「かながわ学」を発信できるような人材を育成する第一歩は、生徒が地域・郷土に関心を持つことだと考える。生徒の興味・関心を高める郷土史学習は、この点においても重要である。

イ「神奈川の郷土史を学習する科目」の創設

そして、県は独自に高等学校での日本史必修化を進めている。「日本史A」「日本史B」を履修しない場合は、県が新たに設ける学校設定科目を履修することとされ、その科目の一つに「神奈川の郷土史を学習する科目」がある。今年度は、この科目の創設に向けた研究が取り組むべき課題となっている。

現在、高等学校に通ってくる生徒は、必ずしも、生活している地域と学校周辺の地域とが重ならない。この意味からも、県下の学校で共通に使用できる神奈川の郷土史教材の開発が求められる。

(5) 研究テーマの設定

このような課題意識から、研究テーマを、生徒の興味・関心を高める郷土史の教材開発とした。学習指導要領で、地域の範囲は、日常の生活圈や県、それらを包含する地方などとされている。本研究では、神奈川県の現在の取組から「県」を範囲とした。

そして、学習指導要領の内容を踏まえて、「歴史の考察」の作業的な学習ができる教材を開発する。郷土史学習の中で、生徒が歴史的な見方や考え方を身に付け、新たな視点で郷土を見ることで、伊藤が述べるように、郷土への興味・関心が高まるだろうと考える。

2 神奈川の郷土史を教材化する視点

(1) 郷土教育運動から見る郷土史学習の意義

郷土史の教材化について述べる前に、まず、伊藤による郷土教育運動の研究を振り返り、郷土史学習の意義について考えてみたい。

この研究で、昭和初期に文部省が推進した郷土教育運動が、明治以来の画一的教育を打破し、郷土研究の素養を身に付けた教師を育て、かつ、児童に現実の郷土を正しく認識させ、あるべき郷土の建設を目指した運動であることを明らかにした（伊藤 2008）。

この視点は、現在の郷土史学習に通用する。画一的教育の打破は、現行の学習指導要領に「歴史の考察」が新設された「覚える歴史学習から考える歴史学習へ」（佐伯真人 1999）というねらいに、郷土の建設を目指

した運動は、「地域社会の歴史と文化」が内容に取り入れられた背景の「地域主義」につながると考えられる。

これは「かながわ教育ビジョン」にいう地域での学びを通じた「コミュニティづくり」につながり、郷土史学習の意義を見いだすことができる。

(2) 他県の教材化に見る課題

次に、県での郷土史学習の教材作成の例として愛媛県を紹介する。愛媛県では県史編さんの成果を教育にいかすため、平成3年、県教育委員会により「高校生のための『愛媛県史』学習資料集」が作成された。

安宅理（2007）は、この資料集の活用状況調査を行った。アンケートでは「全く活用していないと回答した学校が75%」で、「活用していない理由として、『記載内容や資料が難しい』『地域史を扱う時間がない』などを指摘する声が多かった」という結果が出ている。

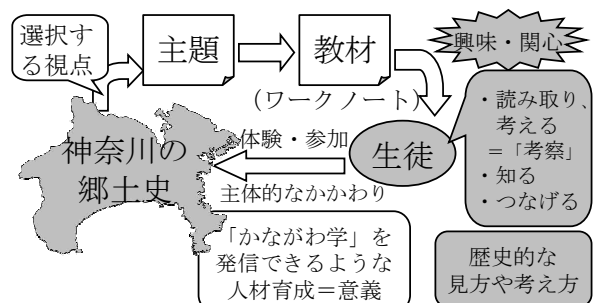
安宅は、この課題を踏まえ、効果的な活用方法の検討を行い、資料集を基に、江戸時代について、生徒の追究活動の補助資料となるワークシートを作成した。

授業に郷土史学習を取り入れるためには、資料集の具体的な活用法の蓄積が必要となる。また、郷土史に高い興味を示さない生徒に、難しい資料集をそのまま提示しても、学習意欲を削ぐ結果になると考えられる。

県の郷土史を教材化するには、単なる資料集ではなく、教師が使用しやすく、かつ、生徒の興味・関心を高めるようなワークシートを集めたノート形式の教材が有用であろうと考える。

(3) 神奈川の郷土史学習の構図

神奈川の郷土史学習の意義を見据えて、教材化の構図を考えた（第2図）。神奈川県の通史がそのまま教材にはならない。その中から、まず、適切な主題を選択する。次に、教材は、生徒が興味・関心を持ち、読み取り、考え、歴史的な見方や考え方を身に付けるような内容とする必要がある。そして、郷土史への興味・関心を高めた生徒が、郷土に主体的にかかわりを持ち、将来「かながわ学」を発信できるような人材となることを郷土史学習の理想的な構図とした。



第2図 神奈川の郷土史学習の構図

(4) 主題選択の四つの視点

この構図の中で、どのような視点で主題を選択するかが重要となる。神奈川県の通史や歴史資料集も出版されているが、そのままでは教材として使用できない。

そこで、郷土史学習の構図や、学習指導要領解説を踏まえて、主題選択の四つの視点を考えた（第1表）。

第1表 郷土史学習の主題を選択する四つの視点

- 視点① 生徒の目線で現在につながる。
- 視点② 「歴史の考察」の方法の理解につながる。
- 視点③ 日本史の通史につながる。
- 視点④ 後の体験につながる。

視点①は、生徒の興味・関心を高めるために重要である。生徒から「なぜ昔のことを覚えなければいけないのか」という質問をよく受ける。また、所属校のアンケート結果でも神奈川の郷土史学習への必要性を感じない生徒が多かった。生徒は、現在の身近な事象が歴史の積み重ねの上にあると認識することで、興味・関心を高め、歴史を見ることができると考える。

視点②は、考察する学習が可能な資料を含む主題を選ぶことである。どのような資料が残っているかは歴史の事象により様々である。学習指導要領解説にあるように「実際の学習上活用し得る資料の状況等を勘案して」（文部省 1999 p. 125）主題を選ぶ必要がある。

視点③は、日本史の通史との関係を踏まえた主題とすることである。学習指導要領解説では、日本史全体との関係を踏まえて「身近な地域から日本や世界の歴史を見る態度や方法を身に付けさせることに留意する」（文部省 1999 p. 126）とある。日本史から神奈川の郷土史を見るだけでなく、神奈川の郷土史から日本や世界を見渡せる主題が最良と言える。また、このような視点で主題を選ぶことで、県下で共通に使用できる教材になると考える。

最後の視点④は、学習したことが、実際にその場に立ったり、見たり、触れたりする体験につながる主題を選ぶことである。これが他の教材にない郷土史学習の利点で、後に実際の行動に移せることが、郷土に主体的にかかわるきっかけになると考える。

(5) 神奈川の郷土史における「地域」

次に、地域としての「神奈川」をどのようにとらえるかという問題がある。「神奈川の郷土史」は、県内各地域の歴史の集合体ということができる。「かながわ教育ビジョン」では、箱根や丹沢大山、湘南などの自然環境に加え、武家の古都鎌倉、城下町小田原、近代日本開国の地横浜の歴史や文化などの各地域の魅力を挙げている。このような地域ごとに、日本史の通史につながるような特徴ある時代の主題を選び、結び付けることで神奈川の郷土史が描けるだろうと考える。

3 「大山詣で」の教材化

(1) 「大山詣で」を選択した理由

本研究では、その地域の中で県中央部に位置する大山を取り上げ、「大山詣で」という主題で教材化した。

視点①からは、生徒が興味・関心を持つ観光旅行のルーツが江戸時代の旅にあり、当時の代表的な観光地の一つが大山であったからである。

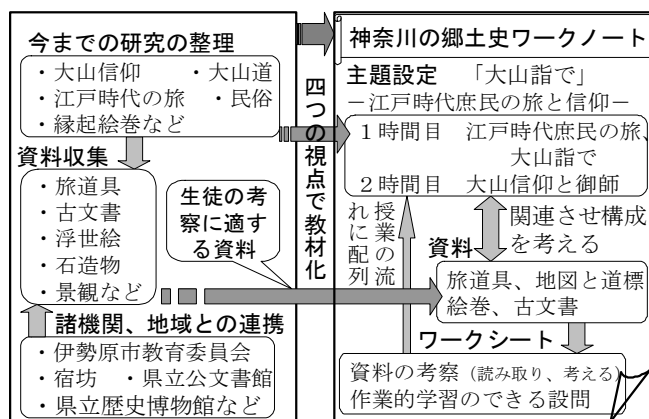
視点②から、この主題は、旅道具、道標、絵巻、浮世絵、古文書、文化財、習俗など、考察の作業的学習に使用できる様々な資料がある。今回の研究は生徒の興味・関心を高める教材開発を課題としているため、なるべく異なる種類の資料を教材化し、どのような資料が生徒の興味・関心を高めるかについても考察した。

視点③では、庶民の旅が盛んになった理由を江戸時代の社会的、経済的背景から、そして、大山信仰が時代により変遷する姿を日本史での宗教思想や宗教政策と結び付けて説明できる。

そして、視点④では、大山は現在でも県内を代表する観光地の一つであり、大山に行くと歴史的な景観に直接触れることができる。

(2) 教材化の実際の手順

次に、教材化の手順について、「大山詣で」を主題とし教材作成した実際の流れの中で説明する（第3図）。



第3図 教材化の実際の手順

ア 今までの研究の整理から主題設定

まず、江戸時代の旅や大山に関する研究を調べる。大山については、『伊勢原市史』だけでなく、他の自治体史にも大山道や大山信仰などの様々なテーマで記述があり、博物館の特別展などでも扱われている。

今までの大山研究で扱われたテーマを抜き出し、主題を選択する四つの視点にかなうような主題を考える。今回は、先に述べたような理由により、「大山詣で」を主題とし、江戸時代の庶民の旅と大山信仰という内容で教材化した。

同時に、研究の中で使用されている資料を抜き出し、どのような結論を導き出すために使われているかもまとめた。

イ 資料収集

ある程度、主題の方向性が決定した段階で、具体的な資料収集に取り掛かる。生徒の興味・関心を高めるために、可能な限りオリジナルの資料に当たった。

大山道に関する資料としては、道標がある。研究で

紹介されている道の分岐点にある道標や特徴ある造形の道標を現地に行き写真撮影した。

江戸時代の旅人や街道、大山信仰の様子を読み取ることができる浮世絵については、伊勢原市教育委員会などから、電子データの提供を受けた。

『伊勢原市史』などに掲載されている宿坊関係の古文書については、所属校と関係のある所蔵者の協力により写真撮影をし、宿坊に伝わる「大山寺縁起絵巻」については電子データの提供を受けた。

そして、実際に大山に行き、今でも多くの人を訪れる夏山の宿坊の景観、大山寺、阿夫利神社、また、各方面から見た大山の遠景などを写真撮影した。

資料収集には、地元の市町村教育委員会や地域の協力が必要であり、実際に足を運ぶことで、地域の催しや現在の大山の様子などの情報を得ることができた。

ウ 資料から生徒が考察するワークシート作成

学習指導要領解説で、「考察させ」とは、「理解する上で調べ考えること」(文部省 1999 p. 111)と書かれている。歴史学は、問題意識を持ち、様々な資料を調べ、読み取り、考えるという実証的な考察を行い、それを関係付け歴史像を描く学問であると考えた。したがって、ワークシートの内容は、資料を読み取り、考えるという「考察」の作業的学習を中心とした。

その際、生徒が考察に取り組みやすいようにする。資料はなるべく視覚的、具体的なものを使用し、設問は資料の読み取りからそれを基に考える問いへと段階を追って作業ができるように工夫した。そして、全体の教材に当たるワークノートは、このワークシートを主題に沿った授業の流れの中に組み込み作成した。

今回、生徒が考察を行う主な設問には、モノ資料として旅道具の「矢立て」、大山道の「道標」の画像資料と地図資料、宿坊の「大山寺縁起絵巻」、信者を廻るための名簿である「檀廻帳」などの古文書資料を使用した。また、浮世絵などの絵画資料、景観などの写真資料は、授業の流れの中で教師が説明する資料として用い、ワークノートに取り入れた。

(3) ワークノートの構成と具体の授業の流れ

ア ワークノートの構成

「大山詣で」を主題としたワークノートは2時間扱いの単元とした。1時間目に江戸時代の旅人が歩いた大山道、2時間目に大山信仰を広めた御師の活動を扱い、大山に来る人と迎える人という多面的な視点で「大山詣で」をとらえる全体構成を考えた。また、各時間のワークノートは、主題を選択する四つの視点を反映させた構成とした。そして、資料を読み取り、分かったことを互いに関係付け、現在と関連付け考えられるような内容とした。

イ 江戸時代庶民の旅、大山詣で(1時間目)

1時間目の授業の流れを第4図に示した。

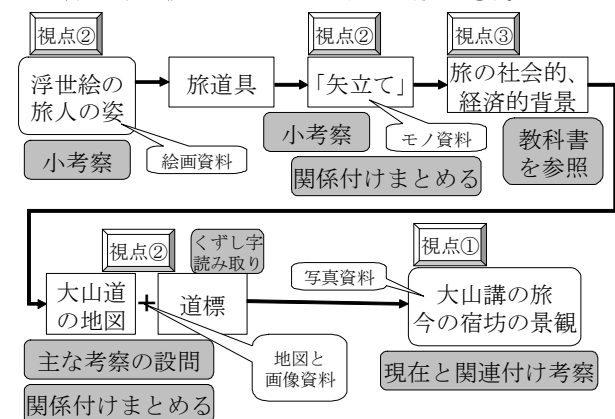
まず、江戸時代の浮世絵から切り取った旅人の姿を

見て、振り分け荷物、脚絆などに着目し、歩く旅であったことに気付かせる。振り分け荷物の中身の旅道具は、携帯する工夫がされている。その中でモノ資料として携帯用筆記用具の「矢立て」を使用し、実物を生徒に触れさせ、用途を考察させる。これは、視点②に当たる。以下、(視点②)のように記す。

そして、庶民の旅が可能になった背景を五街道や宿場の整備、庶民の経済的成長、出版文化など日本史の通史と結び付け説明する。教科書が参考資料として使用できる(視点③)。

次に、写真から道標に刻まれたくずし字の地名を読み取り、大山道の地図と突き合わせ、道のルートをとどる考察を行う。その中で、大山道の一つである矢倉沢往還が国道246号線に重なることなど、現代の道と結び付けて考えることができる(視点②)。

最後に大山に来る旅人は大山講という「講」のグループによる旅が多かったこと、大山で講が宿泊した宿が宿坊でその主人が御師といわれたことを説明し、次の時間につなげた。また、現在の宿坊の景観から講による信仰が今に続くことを説明する(視点①)。



第4図 1時間目の授業の流れ

ウ 大山信仰と御師(2時間目)

2時間目の授業の流れを第5図に示した。

この時間は宿坊の資料を中心に作成した。絵巻資料である「大山寺縁起絵巻」からは、東大寺の建立にかかわった良弁が大山寺の開基であることに注目させる。授業の後半では、絵巻が御師による信者への大山信仰の宣伝に使われたことを考察させる(視点②)。

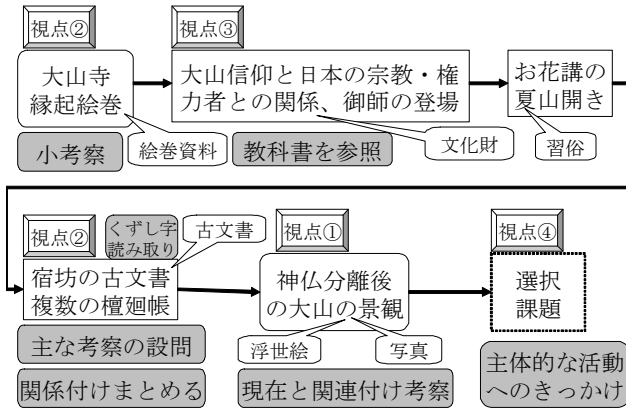
次に、大山信仰を神仏習合思想や権力者との関係と結び付け説明し、徳川家康による改革で修験者が山から降ろされ御師となったことを解説する(視点③)。

そして、御師が檀家廻りをするための土産仕入帳、檀廻帳の読み取りや檀廻帳が売買されたことから、信者を増やすための活動が御師の収入につながったことを考えさせる。また、同じ資料から、様々な地域の様々な職種の民衆が大山を信仰していたことを読み取ることができる(視点②)。

最後に、明治時代の神仏分離政策により大山が今の

姿になったことを説明し、現在につなげた（視点①）。

単元のまとめとしては、授業で疑問に思ったこと、興味・関心を持ったことを記述する。そして、授業で学んだことをいかすために、大山へ実際に行く内容を含む四つのテーマを設定し、生徒への選択レポート課題とし、後の活動につなげるよう考えた（視点④）。



第5図 2時間目の授業の流れ

4 検証授業と事後アンケートの分析

(1) 検証授業の実施

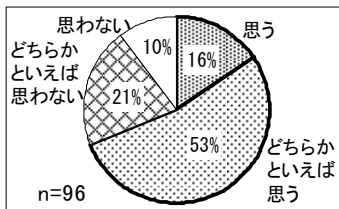
検証授業は所属校の第2学年3学級（在籍111名）の生徒を対象に、平成20年10月27日から31日に実施した。この期間は文化財保護強調週間に当たり、伊勢原市教育委員会による「大山道」のミニ展示が市の中央公民館で行われていた。

授業は作成した郷土史のワークノートにより進めた。また、ワークノートに載せた視覚的資料の学習効果を高めるため、考察や説明に用いる画像を、黒板に貼ったスクリーンにプロジェクタで投影し、生徒に示した。

(2) 授業後のアンケート結果と分析

ア 神奈川の郷土史への興味・関心の高まり

検証授業の翌週に、生徒に対し事後アンケートを実施した。「この授業をきっかけとして、神奈川の郷土史に、以前より興味・関心を持つようになったと思いませんか」という質問に対し、肯定的回答は69%（第6図）



第6図 授業後の神奈川の郷土史への興味・関心

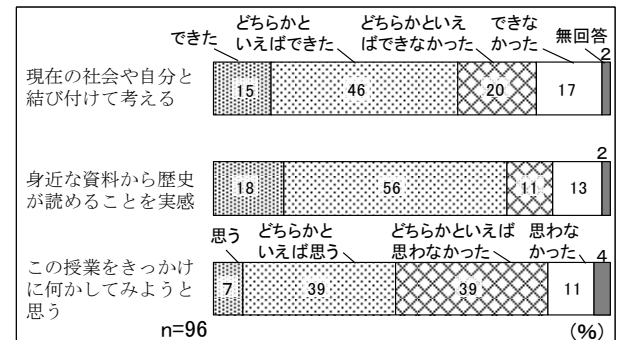
と、授業前の17%を大きく上回った。肯定的回答をした生徒の中で、理由の記載があった44名のうち、「知ることができた」「わかった」が18名と新たな知識を得たことを挙げた生徒が最も多かった。続いて「気になった」「面白かった」「びっくりした」という興味に関することが8名、次に「もっと知りたくなった」の6名が続いた。そして、「地元の大山、神奈川だから」を理由に挙げたのは4名であった。

生徒の神奈川の郷土史に対する興味・関心の高まり

は、身近な地域だからではなく、郷土について新しい知識を得たことによると言える。それが、一部の生徒では「もっと知りたい」という郷土に対する知的好奇心へとつながったことが分かる。

イ アンケートに見る授業後の生徒の意識

生徒の授業後の意識は、「江戸時代の旅や信仰を、現在の社会や自分と結び付けて考えることができましたか」という質問に対する肯定的回答が61%、「身近なモノが歴史的な資料になり、そこから歴史を読み取り、歴史を考えることができると実感できましたか」という質問に対しては74%、「この授業をきっかけに、近くの石碑を見たり、関係する展示を見たり、博物館に行ったり、大山に行ってみようと思いませんか」という質問には46%という結果であった（第7図）。



第7図 授業後の生徒の意識

身近な資料から歴史が読み取れることを実感することは、学習指導要領にいう「歴史を考察する基本的な方法を理解」することである。この質問に対する肯定的回答が、74%という高い割合を示したのは、ワークノートを、様々な資料の考察を中心に作成した成果であると考えられる。資料を実際に読み「分かった」と実感できたことが、生徒の郷土史への興味・関心が高まった一つの要因と考えられる。また、歴史を現在と結び付けて考えることができた生徒も60%を超えている。

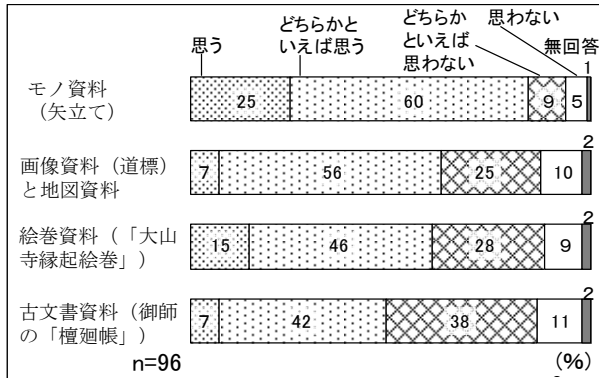
それに対し、学習したことをきっかけに、自分なりに主体的な行動に移してみようと考えた生徒の割合は46%と他の項目に比べると低い割合になっている。郷土の資料から歴史が読み取れることを実感し、興味・関心を高めた生徒が、郷土に対して主体的な行動に移せるようにするための授業後の工夫が必要であるという課題が見えてきた。

ウ 生徒の興味・関心を高める資料

次にどのような資料の考察が生徒の興味・関心を高めるかのアンケート結果について分析する。

ワークノートで使用した資料はモノ資料、画像と地図資料、絵巻資料、古文書資料に分類できる。どのような具体資料を使用したかという影響もあるが、「この教材で、歴史に対する興味・関心が高まったと思いませんか」という質問に対する肯定的回答は、モノ資料が85%、画像と地図資料が63%、絵巻資料が61%、古文書資料が49%という結果であった（第8図）。

特に、モノ資料で、興味・関心の高まりの割合が高くなっている。肯定的回答で理由記載のあった29名のうち、一番多かったものは「実際に見た」「触った」「実感した」が15名、それに「面白い」「楽しい」「わかりやすい」の9名が続いた。次に関心の高い道標の画像と地図資料では、理由記載のあった15名のうち、「身近な道」という答えが6名、「面白い」「興味がある」が4名であった。触って実感できたり、身近に感じる資料が生徒の興味・関心を高めていることが分かる。



第8図 生徒の資料別興味・関心

5 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

生徒の郷土史に対する興味・関心は低いという現状認識から、生徒の興味・関心を高め、歴史の考察の作業的学習ができる神奈川の郷土史教材の開発を探究した。神奈川の郷土史を学ぶ意義、主題選択の四つの視点、教材化の手順を考え、県下の学校で共通に利用できるような「大山詣で」を主題とするワークノートを作成した。そして、検証授業の結果、生徒の神奈川の郷土史に対する興味・関心に高まりが見られた。

また、ワークノートで使用した資料では、生徒にとって直接触ったり、身近に感じられるものが、より興味・関心を高めることが分かった。このような資料を見だし、積極的に授業の中に取り入れることが、生徒の興味・関心を高めるために有用であると言える。

(2) 今後の課題

授業後のアンケートの中で、「授業の進み方が速い」という指摘が、複数の生徒からあった。考察する資料を盛り込み過ぎたため、一つひとつの設問に取り組む時間が十分に取れなかったことが原因と考えられる。

日本史の通史とのかかわりについても、教科書で調べさせ、既成の知識と結び付けるようにしたが、説明時間の不足もあり、理解ができた生徒は半数程度であった。

今後、生徒や地域の実態に合わせて使用する資料を取捨選択するなどの工夫によって、県下の学校で共通に使用できる教材に成り得ると考える。

次に、授業で高まった神奈川の郷土史への興味・関心を、どのように郷土への主体的な活動へとつなげる

かという課題がある。授業の最後に、次の四つのテーマで選択するレポートを課した。レポート提出者71名の内訳は、授業内容にかかわる神奈川に関係した自由テーマが36名、授業で得た知識を基に江戸時代の旅日記を読むテーマが20名、実際に大山へ行って興味を持ったテーマが15名、市教育委員会主催の大山道の展示を見学するテーマが0名であった。

レポートの選択数から見ると、実地見学を選択した生徒は少数であり、部活動の中で大山に登り、そのことをレポートにまとめた生徒が多かった。学習を生徒が実際に郷土に触れる活動につなげるためには、総合的な学習の時間での調べ学習や遠足などの学校行事と関係付けた授業展開が必要ではないかと考える。

おわりに

生徒の興味・関心を高める神奈川の郷土史の教材化を進めるためには、教師自身が郷土を見る眼を磨くことも必要である。ただ個人で県全体の教材化を図るには無理がある。それには、各地域の教師が県下の博物館、公文書館などの施設、地域の教育委員会と連携し、郷土史教材を開発し、それを共有化するようなシステムづくりが今後重要であると考えられる。

引用文献

- 文部省 1999 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版 p. 111、p. 125、p. 126
- 国立教育政策研究所 2007 「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点(地理歴史・日本史B)」 (http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17_h/h17_h/05001022240004000.pdf (2008.12.9 取得)) p. 1
- 神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」 (<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/40/4001/forum/bijon.pdf> (2008.12.18 取得)) p. 57
- 安宅理 2007 「日本史Bにおける『地域社会の歴史と文化』の教材化(2) — 『愛媛県史学習資料集』を活用した江戸時代の学習 —」(愛媛県総合教育センター 『教育研究紀要』第73集) p. 6
- 伊藤純郎 他 2000 『総合的学習で役立つ 調べてみよう 地域・郷土』ぎょうせい 巻頭言

参考文献

- 伊藤純郎 2008 『増補 郷土教育運動の研究』思文閣出版
- 佐伯真人 1999 「各教科等の新しい課題 2 地理歴史 日本史A、日本史B」(文部省『中等教育資料』7月号 大日本図書)
- 佐藤照雄 1981 「新しい日本史学習の課題と方法」(同編著『日本史の授業展開』学事出版)